

帯金式甲冑の製作技術

The Manufacturing Technology of *Obigane-shiki* Armor

古谷 毅

FURUYA Takeshi

はじめに

- ①古墳時代金属資料観察の視角
- ②帯金式甲冑の製作技術
- ③帯金式甲冑の設計
- ④まとめと若干の展望

【論文要旨】

帯金式甲冑は製品の技術的均質性から古墳時代における金属製品の典型として早くから注目され、その変遷には急速な技術的発達や新米の大陸系技術の導入を看取できるために、当時最先端の金属加工技術が投下された製品のひとつと考えられている。マロ塚古墳出土甲冑群は稀にみる良好な遺存状態を保持するため、帯金式甲冑の製作技術に関する類をみない豊富な情報をもつ。本資料群の調査・報告・記述にあたり、その製作技術を整理するために、各技術の性格にしたがって構成要素を分類・整理した。

一般に製作技術は材料の加工技術だけでなく、計画（デザイン）・設計などを含む体系的な技術群である。しかし、調査可能な対象は主に遺物表面に遺された諸技術の痕跡で、製作技術自体についても残存するこれらの痕跡および遺存物から想定するほかはない。そこで、帯金式甲冑の製作技術・技法に関する観察項目を12項目設定した上で、製作工程を第Ⅰ（成形）工程・第Ⅱ（整形）工程・第Ⅲ（組立）工程・第Ⅳ（仕上）工程の4段階に分け、各工程で施された技術痕跡を分析した。その結果、各工程で用いられた技術は段階的に投下されており相互に階層的な関係が認められた。そこで、それぞれの技術群を技術群A～Dとし、現代工学の分類概念に照して、素材の変形を主とする変形加工（塑性加工）：技術群A、切削などを主とする除去加工（機械加工）：技術群B、および接合などを主とする付加工：技術群Cに該当すると考えた。また、装飾等に用いられる鍍金・彫金等の金工技術や有機質構造材を使用した皮革加工技術等は、追加的な非金属工芸技術：技術群Dとした。

このような視点で帯金式甲冑における製作技術の全体像を復元し、さらに技術群相互の関係を検討して、技術群の変遷から背景にある製作集団の編成・再編などの見通しを述べた。また、構造が比較的単純な付属具の分析結果から、帯金式甲冑の部品製作や組立技術の特徴に窺われる設計原理を検討した。

【キーワード】 帯金式甲冑、板綴、頸甲、製作技術、塑性加工、設計